****

**海外での赴任生活**

2023年5月吉日

西村勝治

Ⅰ　イギリス編

１．はじめに

1992年から2001年までの9年間、ロンドンで赴任生活をしました。忙しくも楽しかったあの頃を思い出し、纏めてみました。

２．なぜ海外での仕事を希望したのか

海外で仕事をしたいと思ったことはありませんでした。映画が好きで、海外生活や英語を話せることに憧れはありました。初海外は新婚旅行のハワイです。英語を話すことが出来なく、惨めな気持ちで帰国したのが、直接のきっかけでした。帰国後、英会話の教材を買って、英会話教室に通いました。英語環境に身を置くのが上達へ最善の方法だと考え、英語圏での営業を希望して、ロンドンの事務所に欠員があり、赴任することになりました。

３．イギリスでの生活

「郷に入っては郷に従う」の言葉通り、現地スタッフに教えて貰うことばかりでした。テレビやエアコンも無く、傘を差さない人が大勢いる、物質的には貧しいが、自然が豊かで誰でも優雅に暮らしているというのが、当時のイギリスの印象です。イギリス人の自然と共存するという姿勢は今も変わりません。洋上風力発電では世界のトップを走っています。本日は戴冠式で、テレビでみるロンドンは今も当時も変わりはなく、その威厳のある儀式も勿論、変わらぬままでした。イギリスの自然保護に、皇室が深く関与しています。ナショナルトラストという風光明媚な土地を所有する皇室は、土地開発を認めません。洋上風力の場所にも意見を出して、大半は沖合数十キロ先に設置され、陸上から風車が見えません。豊かな自然が、これからも変わらぬイギリスは、第二の故郷です。

４．イギリスでの仕事

海外での仕事は、1996年を境に変わりました。それまでは電話とFaxだけが情報の伝達手段でしたが、それ以降はインターネットで情報を収集し、やり取りはメールに変わりました。情報が簡単に入手出来るという利点がある一方、いつでもどこでも24時間中やり取り可能という問題も出てきました。もっとも、海外の仕事は、文書の遣り取りが基本です。電話やFaxだけの時代から、会議の時は先に議題を送り、会議が終わるとメモを送る習慣は、インターネットがメインになっても変わりませんでした。初めて会ったお客に、挨拶状を送付する。交渉が難航すると、遣り取りはメールに残すといったことは、大事な仕事の進め方の一つです。コミュニケーションを取ることが、会社で一番重要だとイギリス人の友人から教えて貰いました。

５．おわりに

海外で生活をすることは、日本以外の国を知るという意味がありますが、日本を知るということでも、大きな意味があります。日本のことを考えたり、勉強したりする良い機会です。イギリスに赴任したことで、日本のことも知ることが出来たと思います。

Ⅱ　中国編

１．はじめに

2010年から2013年までの3年を天津で、2013年から2017年までの4年を瀋陽で赴任生活しました。中国語を全く話すことが出来なかったのに、楽しく過ごすことができる様になった経緯や東北の面白さを纏めてみました。

２．天津と瀋陽

天津と瀋陽は北にある冬は氷に閉ざされた街です。天津は、秋田と同じ緯度で面積も同じです。人口1200万人の直轄市で、北京から新幹線で30分という便利な場所にあります。海外の企業も多く、日本からはトヨタが進出しており、トヨタに関連する企業も多数進出しています。日本人は5000人です。欧米の統治時代の名残がある文化の香り漂う街です。瀋陽は、東北遼寧省にある街、人口は800万人、函館と同じ緯度ですが、冬は－30度近くまで下がる極寒の地です。日本人は150人です。漢民族と清の満州族と朝鮮族が集まる肥沃な土地です。戦前の名は奉天です。BMWが大きな工場を持っています。日本企業は三菱重工などがあります。

３．中国での生活

中国語が話せないと生活は大変です。買い物や食事は、大丈夫ですが、街が広いので、タクシーに乗れないとどこにも行けません。紙に行き先を書いて渡せば、良いですが、何度も口頭で挑戦しました。毎回紙を見せることになるのが、悔しくて、週4回個人指導を受けました。英語で教えて貰う方が理解し易いと聞いて、英語で中国語を勉強しました。天津の週末は、日本人とのテニスやゴルフで、夜は日本食レストランで会食。異業種交流です。瀋陽でも、日本人とテニス等を楽しんでいましたが、仲間の紹介でバドミントンを始めました。天津と違い、参加者に瀋陽の中国人がいたので、食事は、日本食では無く、東北の中華料理や韓国料理や西洋料理まで評判のお店を探索することが出来ました。土地が肥沃で幾つかの民族がいる瀋陽は食の都です。中国人だけのバドミントン倶楽部にも参加し、中国のことを直接教えて貰うことが出来ました。白酒は何度も付き合いました。

４．中国での仕事

中国でもコミュニケーションが重要であることは変わりませんでした。但し、基本的には通訳を介してのコミュニケーションなので、時間が倍かかってしまいます。残念ながらこれは避けては通れないことです。中国人はアメリカ人と同様に自己主張が強いですが、何故そうするのか理由を説明すると理解してくれます。中国では日本以上に会食を大事にする傾向があります。お客が来ると毎回会食です。仕事では一人一人の気持ちを大事にし、信頼して仕事を任せると頑張ってくれるという印象です。瀋陽から通訳無しで、直接話をしたので、気持ちや考えを理解して貰えたのかも知れません。

５．おわりに

どちらが好きですかと聞かれたら、瀋陽です。中国語が話せ、直接コミュニケーションが出来たことが大きいです。天津は、南からの出稼ぎが多かったのに対し、瀋陽は東北人がメインだったことも影響しています。日本が何故東北の地に満州国を設立したのか、良く分かります。

Ⅲ　纏め

イギリスの赴任生活と中国の赴任生活はどちらが好きですかと質問されることがあります。これは、パパとママのどちらが好き、と子供に質問する様なもので、答えるのに困ります。どちらも好きですとしか答えようがありません。違ったものを同じ土俵で比較できないというのが、正直なところです。イギリスは、成熟した大人の社会でしたが、中国は、昔懐かしい、子供のころを思い出す社会でした。イギリスの魅力が変わらないことの魅力ならば、中国の魅力は変わっていくことの魅力といえるかもしれません。精神的に幼い中国ですが、デジタル化は、日本のはるか先を進んでいます。イギリスも中国も違った魅力で一杯です。

イギリスと中国で赴任生活をしたことで、世界の中の日本をより楽しむことが出来る様になったと感じています。チャンスがあれば、海外で赴任生活をすることをお勧めします。円安で金銭的に大変ですが、短期間の海外旅行でも、新しい発見があると思います。

以上